
人

ここあぱうだーいちごうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人

【Zコード】

Z2720M

【作者名】

ここあぱうだーいがくつわ

【あらすじ】

この物語は、人間のお話。

人の理想、思い、そして人生。

我々の住むこの日本と言つ国で、

人々は日々を作り上げ、日々を生きる。

そして人々は理想を追い求め、望み、励む。

けれども、そこに一つの言葉が突き刺さる。いつもと同じような日。

”一般人”の彼らは犯罪者と話をする。

犯罪者 零（前書き）

この物語は鬱仕様があるよ、俺（私）は人生余裕だぜっ！って方に
はまどりつつこじい描写があるかもしれないよ。

少しだけグロテスクな描写があるよ、その辺り大丈夫ですか？

ファンタジーと書つほどファンタジーじゃないかもしれないよ。
少なくとも魔法とか魔物とかは出ないよ。

あからさまな萌えキャラとかは出でこないよ、そんなお話じゃない
よ。

色々な考え方の人がいると思うから一括りにこうつ社会だという
わけじゃないよ。
現実的な思考で描くつもりだけど悪魔で作り話だよ。

中途半端に読むとただの鬱人の日記みたいになるので時間が無いと
きにスウワスウワツと読むのはあんまりオススメしないよ。
出来れば自分に置き換えて考えてもらえたたらとつても嬉しいよ。
(もちろんそのスウワスウワツて読む読み方も否定はしないよ。)

それでは、お願いします。

犯罪者 零

今日は曇り空で。

お世辞にもいい天気だなんて言えるような空模様では無かった。

僕は近頃、なんていうか…こう。

僕という人生の枠を勘違いしていたことに気がついた。

きっかけは些細な事で、

そのきっかけ故の理由も本当に大した事も無くて。

それでいて、僕はとても憂鬱な気分で。

僕は今まで、綺麗な幸せを求めていた。

いや、こればかりは今も求めているのだろう。

その証拠に、僕は今憂鬱なのだ。

だってほら、綺麗に見える社会、美しい漫画やアニメの世界、そしてそれを創る職業。

憧れとは人をここまで盲目にさせるものだったのか。

時に、人は幸福論と言つものを人それぞれに持つている。

その幸福論は本当に似たり寄つたりの時もあれば、表裏のよつた時もある。

僕の幸福論は、少々都合が良すぎた贅沢だったのか？

理論的にも、現実的にも考えていけばそこそこしたることは自分でもわかってる。

けれどそれまでの僕の理想を碎くのに止めを刺すと言つ事は、

どうしても今の僕には覚悟が足りないので。

それもこれも…。

僕にとって幸せか否か、あの人と会ってしまったこと。

あの人と話してしまった事が、僕の人生をカーブさせたのかも知れない。

そしてあの日も、今日のような曇り空で、天気予報は降水確率50パーセントと放送していた日。

僕が犯罪者と雨宿りをした日。

犯罪者 一（前書き）

この物語は、フィクションだよ！
実際の人物、団体、会社とかそういうのは関係ないよ！

始めに、僕と言う人間はただ一人の。

ただ一人の普通の高校生である。

それは他人からも認められ、嘘ではないと言える事だ。

このぐらいの年頃というものは、現実というものが薄々と見え始め、そろそろ将来の夢、進路、などに本格的に決め事をしなければならなくなる年齢もある。

だからといって、諸々の夢というものが縮こまるわけではなく、僕は中学のころからの理想を、その時もしっかりと追い求めていた。

これからも追い求めていくつもりだった。

僕は中学のころからなりたい職業を決めていた。

実のところ物心ついた辺りから、そんな感じのことは考えていた。

けれども本格的にその決意をしたのは、その中学生のアニメ全盛期の頃だった。

基本的には、いつの間にか、自分の知らないうちに自分をひく何かに囚われているもので、

そしてそれが、いつしか自分の希望になっていることも少なくはないかつたりする。

僕の場合、それは漫画であり、僕の夢は”絵描き”だった。

絵描きと言つても、風景画や人物画なんて現実味があふれるものではなく、

僕が書きたいのは漫画やアニメの…、いわゆる一次元の世界という奴だった。

テレビの中で泣いたり笑つたり、わめいたりして動き回るキャラクターに、

僕は子供の頃から憧れていた。

そしていつしか、自分自身そのキャラクター達を書きたくなつたのだ。

気がついたころには、僕の部屋にファイリングされている絵の数は、結構なものになつていた。

そしてこれからも、僕は絵を描き続ける、愛する一次元のキャラクター達を書き続けるんだ！

…はずだつたんだ。

別に事故でもあって五体不満足になつたわけでもない。ペンを握れなくなつたわけでもない。

だけれども、今僕は、絵を描くことが出来ないのだ。

それもこれも、大雨が降り注ぐ日の出来事のせいだ…。

その日僕は、学校に傘を置いてしまっていた。

学校から帰るとき、雨は全く降っていなかつたので、油断してしまつていたのだ。

あるものが入つた紙袋を手に持ち、歩いて二十分の家までの道のりを歩いてくる。

だいたい十分くらー、ちょうど半分くらー歩いた所で、ぽつぽつ……と雨が降ってきたのだ。

少し雨が降ってきたな、学校に傘を置いてしまつた。

そんなことを少し考えていたら、その雨ときたら、ざあざあ振りになつてきたもんだから、

僕は急いで近べの雨宿りできやうな場所を探した。

すると昔潰れた駄菓子屋が田にほいつた。

その駄菓子屋の屋根なうり雨宿りすることができたので、僕はそこに走った。

実のところ僕はあんまり日がよくなくて、ある程度近くに行くまで、その駄菓子屋の屋根の下で雨宿りをしている先客がいたことに気づかなかつた。

しかしそんな事は造作の無い話だ。

なぜなら僕が今持つているこの紙袋の中身。

こいつがぬれてしまう事はどうしても避けたかったからなのだ。

僕自身がぬれる事なんて大した事じゃ無い、けれどこいつがぬれてしまうことは、

どうにも僕には耐えられなかつた。

だからそんな先客がいたことなんてお構いもせず、僕は雨宿りをすることにした。

先客の男は、タバコを吸いながら空を見ていた。

僕は軽く頭を下げ、男の隣で雨宿りをする。

「お前さん、よほどそいつが大事なんだな。」

少し驚いた、男が急に話しかけてきた。

別におかしな事じゃない、けれどこの人は僕とは初対面だ。
少なくとも僕の知っている人じゃないはずだ。

凄い雨ですね、いつ止みますかね？ぐらいの言葉をかけてくるかも
しない、

僕はつくりそんな風に思つていた。

けれども男は、そんな会話をすつ飛ばして、僕の大事そうにしてい
るこの紙袋のことを聞いてきたものだから、小心者の僕は少し驚い
てしまつたんだ。

「それだけ大事そうに持つてゐるんだから、きっと何か特別なもん

「それでもつて、僕は一言、「えつ？」と言つた。

なんだらうな。」「

その男は少しひげを気にする素振りをしながらそう言った。

僕はその問いに「ええ、でもよくこれが大事だつてわかりましたね」と言った。

すると男は少し笑つて、

「あれだけ大事そうに雨から庇いながら持つてたんだ、それにこの屋根の下についてからも、そいつがぬれてないか心配そうにして、ぬれてなくてほつとしていた、これだけの情報があれば、そう思わざるおえないだらう。」

確かに僕は、無意識のうちに屋根の下に入つてからすぐ、この紙袋がぬれていなかを確認した。

けれどそれはほんの数秒の事のはずだ。

「よく見ていらっしゃるんですね……。」僕がそう男に告げると、

「職業癖でね、人間觀察はどうも……。」こう言い返してきた。

すこしこっちを見て言葉を交わしたその顔は、少し老こを感じさせる程度のものだった。

右目の下に2つの並んだほくろが特徴的な白髪で短髪の男性だった。

ふと、僕は急にこの顔を見た事がある気がした。

確かにこの人物を僕は知らない、声も聞き覚えがない、けれども見た事のあるような気がした。

学校の用務員さん？どこの知事？どれもピンとこない。

僕はもう一度男の顔をよく見よつとした。

その時、一瞬雨がさらに強くなつた。

少し驚き、駄菓子屋の屋根の下から、辺りを見渡してみた。
この辺りはあまり活気の無い商店街で、ほとんどが店をたたんでしまつている。

すゞい雨のせいか、辺りに人影は全く無かつた。

まるでこの世界に、この男と僕だけが取り残されたかのよう、人の生きている感じが全くしない景色だつた。

「なあ、お前さん。」男が語りかけてきた。

僕は「なんですか？」と聞き返す。

「無理にとはいわねえが、あんたのその大事そうなもの、俺にみせちやくれねえか？」

僕は考えた、見知らぬ人にこれを見せる？

別に減る物じやないし、いけないわけではないけれど。

これを失う不安があつて、少し戸惑つた。

「ダメですかい？」男が聞いてくる。

僕はどうしようも不安があった、けれども別にどうなるわけではないと考えた。

それに「」の…。「」の紙袋の中にあるものには自身がある。

きっとこの人も僕の作品を褒めてくれるだろう…。

なんてことを僕は考えていたのかもしれない。

僕は男に紙袋から取り出した絵を差し出した。「ぬれないように気をつけくださいね。」そういって

「ほお、絵か。」男は表情も変えずにその絵を見た。

その絵は僕の最高傑作といわんばかりの作品だった。

結構大きな絵で、学校の美術室を借りて数週間かけて創った絵だった。

美術室を借りたといつても、決して風景画などではなく、

その絵のタイトルは、「廃墟と少女」。

廃墟の前に少女がたたずんでいる絵である。

廃墟の哀愁と少女、なぜか「」のものに僕は美德を感じていた。近頃の僕は、こういう哀愁と虚しさなんかを感じる絵に、美しいキャラクターを取り入れると云つ、そんな感じの絵にはまっていた。

そんな中、「」の作品はもつとも線も構図も綺麗に書けた気がしてい

た。

男はあいも変わらずに表情を変えずにその絵を見ている。

僕はてっきり、上手だねえ、すごいねえ、と初老の老人が良く言つ褒め方をされるとばかり思つていた。

むしろそれ以外なんていわれるか思いつく事は無かつた。
それほどまでに自身があつたのだろう。

けれども男は、「なんだい」の絵、真つ白じやないか。」と呟つた。

犯罪者 二（前書き）

この物語はフィクション云々（一参照）

そりやあ僕は驚いたさ。

本当に本当に驚いた

この男が何を言っているのか全く理解できなかつた。

思わずその絵を見直してしまったくなってしまったよ。

にれどやにりその絵には僕の最高傑作である絵が描かれていた

僕はこう言つた
当然由緒りなしに、ないてつかう

だつて白紙じやないもの、どうせこの男は「冗談でも交わすつもりだったのだろうと僕の頭をそんな考えがよぎつたが…

「そうかい？ それじゃあと二か白紙じゃなしを説明してくれるかい？」男はそういった。

「ほ、ほら、ここに廃墟があつて、ここに少女がいて……。」僕はそんな説明をした。

「それで？」男はただそう言つた。

「全然白紙じゃないじゃないですか、ちゃんと絵は…。」僕が言いつた。

「廃墟があつて、少女がいて、それでいてなんなんだい？」

「…。」僕は思わず言葉を失つた。

意味のわからない。

廃墟があつて、少女がいて、…それだけだ。

だけどそれが白紙?白紙つてなんだ?僕は馬鹿にされているのだろうか?

そんな考えが僕の頭をよぎつた。

「馬鹿にしてるんですか?」よせつた言葉はそのまま口ひでていた。

「お前さん、いつこいつ言葉を知っているか?」男が話す。

「死んだよには生きたくない…ってね。」男が絵を僕に返してきました。

「どうこいつことですか?」僕は聞き返した。

それはそうだが、死んだよには生きたくない。そんなこと僕の絵に何の関係があるのか。

僕にはせつぱり理解する事は出来なかつた。

「簡単なことや、意味合いがわからないのさ。」男がおかしな答えを返答してきた。

「意味無く生きてるのは死んでいるのと同じだ、この絵はそれと同じで、美しいが生きてはいない。生きていらないものに色なんて存在しない、だからこの絵は白紙、またはただの点と線つてとこりだ。」

僕は心底この言葉を上手によつ整理しようと頭の中で頑張っていた。

けれども、この言葉は僕の絵を褒めてはいない。

僕の最高傑作が、僕の今までのつみかさねの結晶が、否定された気がしてなぜだか、

急に胸が熱くなつた。

「色がない？ 色彩はこだわつてつけてるんですよ？」 僕は男に強めに言い放つた。

すると男はこいつ返答した、「お前さん、絵描きになりたいのか？」

男の声はさきほどと表情をかえず静かなものだつた。

「そうですね……。」 僕はこいつ答えた。

すると男が返した答えはひどいものだつた。

「死んだよつに生きる絵描きか、絵も死にっぱなしたあ、ひどい話だ。」

僕の胸はさりに熱くなり、血が上つてくるのを感じた。

「あなたさつきから失礼ですよー？ 人の絵を死んでるだのなんだの

……」

すると男が手を僕の前に出して、"ストップ"と言わんばかりの手振りをした。

そして胸ポケットからタバコを出して、それくわえて火をつけて、

ふーっ…と煙を吐き出していった。

「お前さん、何を思ってこの絵を描いた?」男はそう呟いてきた。

僕は「え?」とひたすら言葉が出る。

何を思つて。

何を思つてか。

そういうえばそんなこと、考えてなかつたかもしれない。

強いて言つなら、絵を美しく描くこと、そしてこれを認められるようになります。

そんなことばから思っていた氣もある。

「なんていいうか…、専門外でよくわからないんだが、お前さんの心がこの絵には感じられないんだよ。」

男はまた、わけのわからない一昔流行った様な、そんな台詞を言った。

「お前さん、何を思つてこいつを書いた?この描かれた女の子…か?こいつには人を感じない。」

僕は言い返す、「絵に人を感じられるわけないでしょ? だって絵じゃないですか?」

すると男は少し笑った。

そしてそのままじつじつと。「じゃああいつはなんなんだい?」

その時の男の顔が、いやに僕は氣に食わなかつた。

そしてその発言も。

絵は絵だ、それ以上でも以下でも無い。

僕はそう思った。

だから「あれはただの絵です!」そう答えた。

男はふーん…とだけ言つて、タバコを消した。

「いやあ、すりて通り雨でしたねえ。」と男が駄菓子屋の屋根の下から出た。

気がつくと、あのすりて雨はいつの間にか止んでいた。

「さて、私はこれで。」男が去ろうとした。

けれど僕の心はまだトゲトゲしたままだ。

「ねえ…わたくしの」と…」

そう男に叫んだ。

男は「じつを見ないまま「昔の絵でも見てみるといい。」とだけ言った。

そのまま男はどこに行ってしまった。

僕はそれで不機嫌だった。

それもそうだ、会つてすぐの他人に、自分の最高傑作を否定されたのだから。

けれども、どうしてもあの男の言葉が気になつて、僕は家に帰つてから、小学生のころに描いた絵を取り出した。

今とは比べ物にならないくらい手糞な絵がそこにはあった。

ほら、やつぱり今の僕の方が上手い。

そんな考えなおす必要もなべういあたりまえのこと僕は思つた。

まじまじと二つの絵を見比べていた。

やつぱり何も感じない。

もしかしてあの男。

昔絵描きでも目指してて、叶わなかつたから若者に意地悪をしたとか？

そんな考えも僕の頭をよぎった。

結局そんな気にする事じゃなかつたんだ。

そつ自分に言い聞かせて僕は納得しよつとした。

しかし。

昔の絵をしまおつとした時、ある事に気がついた。

その昔の絵は、勇者の一行が魔王を倒しに行く絵だった。

わざわざも書つたとおり、ものすごく下手な絵で、今じゃ田んぼでうりやないような絵。

本当に一応保存してあるだけの絵だった。

そしてふと思つたところで、自分の最高傑作の絵を見る。

…。

…。

…。

違つ。

決定的に違つ事を見つけた。

それは勇者達を見て氣づいて、下手糞な魔王城を見て氣づいた。

僕の最高傑作だつたその作品は、本当に”生きていない”ような、そんな感じがしてしまつた。

「 そうか。 」

ただそうとだけ言つて、僕は綺麗に人間のキャラクターを紙に書き始めた。

けれどもそれは、なかなか思つよつては描けなかつた。

そして僕はそれから絵を描き続け始めた。

そして今に至る。

あれから何度も書き直したが、思つよつたものは描けない。

いつの間にか忘れてしまつたものを取り戻すのは意外と困難だつた。

そしていつしか僕は、書くことを諦めてしまつになつていた。

ふと、こんな事になつた理由を辿つてみて、

あの男の事がきになつた、確かに見た事がある気がしたのだけれども、やはり身近にいる人物ではなかつたのだ。

あの男は一体誰なのか？ そう思つてゐたある日のこと、

通学途中にある交番をちらりと見ると、見覚えのあるほくろが2つ。

指名手配犯であり容疑は一家殺人、名前は…。

「HEY! KEITO、浮かない顔してんな。」

「いや、久々に日本に来たってのに、若者に無駄な説教をしてしまつてな。」

「説教？悪人に説教たあ、大分ひでえ奴だな。」

「いや、未来ある若者に無駄なことをしてしまつたかも知れないな。」

「他人の人生がどうなるうとあたしらにや関係ないだろ？ KEITO。」

「…そうだな。」

名前は、田中和人日本人の男性。

あの雨の日に僕が出会った那人、彼は犯罪者だったのだ。

イ一ハ一!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2720m/>

人

2011年1月28日01時09分発行